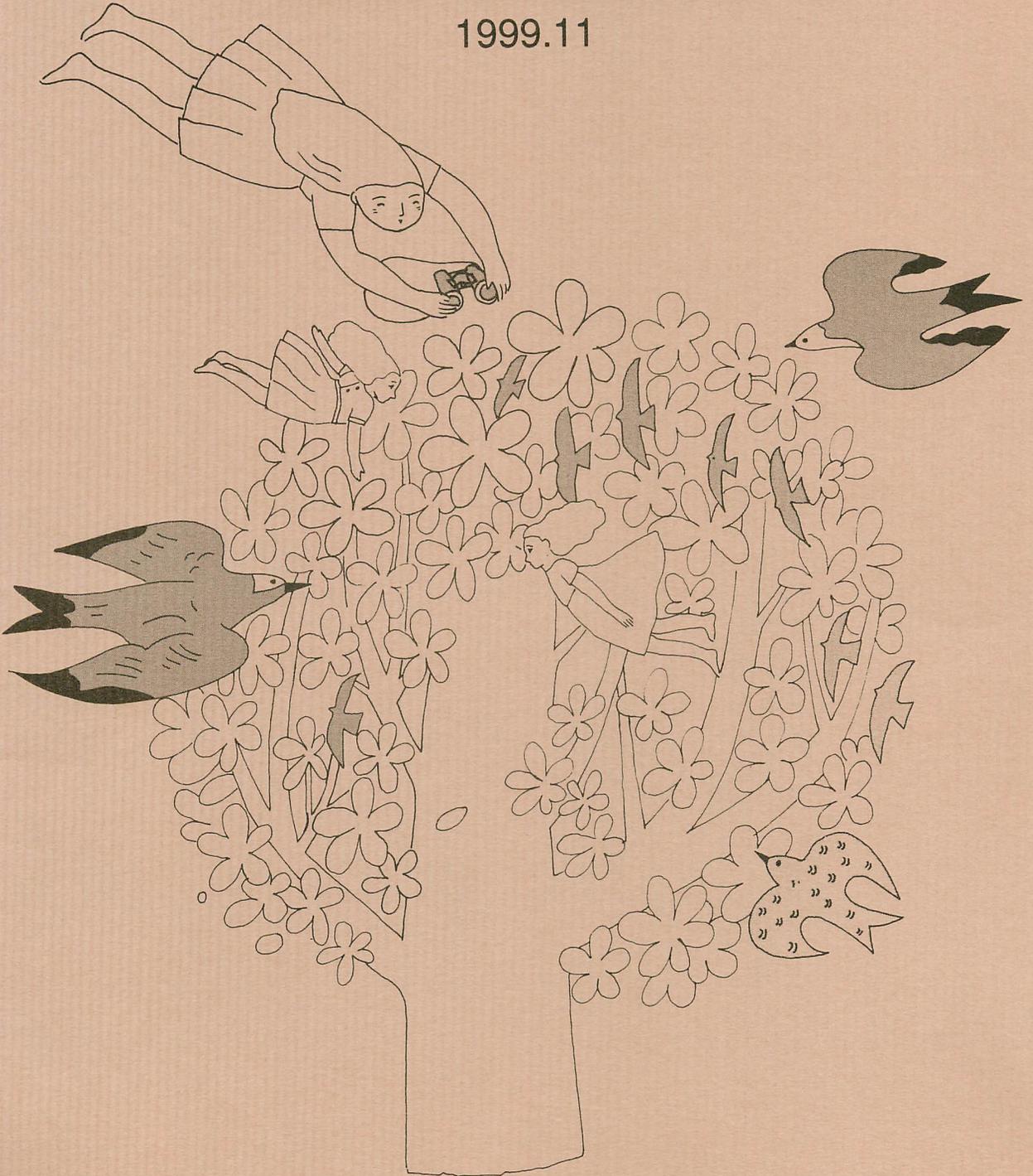


58号

愛鳥教育

1999.11



全国愛鳥教育研究会

愛鳥教育 No.58 1999.11

目 次

実践報告	書籍紹介 ----- 平田寛重	14
青少年のための	平成11年度 事業計画 ----- 箕輪多津男	16
科学の祭典「熊本」大会	講演会案内 -----	17
ライジングバード	トラストバードウォッチング案内 -----	18
in グランメッセ熊本 ----- 田中 忠	水元公園親子探鳥会案内 -----	19
ウォッチングのヒント	論説	
望遠鏡+液晶ビデオカメラ ----- 平田寛重	在来種の保護について ----- 平田寛重	20
生命に思いを馳せること ----- 箕輪多津男	編集後記 -----	21
もりまさ通信(8)	愛鳥クイズ ----- 平田寛重	22
ふくろうの足元 ----- 森 真希		

実践報告

青少年のための科学の祭典「熊本」大会

ライジングバード in グランメッセ熊本

熊本市愛鳥教育研究会 田 中 忠

1 はじめに

1900年代も今年で最後となる。歴史をひも解くわけではないが、私たち人類が創り上げてきた文明文化の中で、今ほど多くの課題を早急に解決しなければならない時代があったのだろうか。環境問題を頻繁に耳にするようになって10年が過ぎ、今日の教育がかかえる課題の現況を見てもまたしかりという感がする。

科学技術の振興に伴い、生活文明は便利さと大量消費を追求し、栄華を極めたとも思える社会の中で、時間に追われながら日々走りつづけている姿に気づいたとき、本当にこれでよいのかと問いただしたくなる。同じように、子どもたちの姿を見ても大差なく、時間と社会の危機にしばられた彼らの生活の中で、草花の美しさを楽しみ、どろんこ遊びをし、大地の感触や香りを身体で覚え、身のまわりの動物たちと心で対話しながら成長している子どもがどれほどいるのだろうか。

自然の中で生きられる心の豊かさこそ、私たち人が求めなければならない究極のテーマであり、それなくしては健やかな成長などあり得ないと考える私だが、とりわけ幼・少年期における自然体験は、その子の一生を形成するのではないかと思えてならない。

私は幼いときから、レンゲのジュウタンの上をころげまわり、魚や鳥と戯れてきた。その豊かな心を、一人でも多くの子どもたちと分かち合いたいと考えている。

さて、研究会の活動が11年目となった昨年、科学技術庁主催の「青少年のための科学の祭典」がグランメッセ熊本を会場として開催されることとなった。そこで県下の子どもたちに愛鳥精神を啓発するチャンスと考え、会員の先生方とともに本事業に取り組んだので、ここに報告したい。

2 主催・期日・会場

主催：「98青少年のための科学の祭典」熊本大会実行委員会・科学技術庁・(財)日本科学技術

振興財団・科学技術館

期日：平成10年11月28日(土)29日(日)

会場：グランメッセ熊本

3 祭典までの取り組み

5月26日 大会開催予定を会員へ案内

8月28日 大会参加決定

9月15日 内容検討

10月15日 研修会(1)見本制作・検討

11月6日 研修会(2)制作研修・担当決定

11月10日 パーツ制作・印刷発注

11月25日 最終チェック

11月27日 搬入・準備

4 準備物と経費

準備物

・原画 ・色鉛筆(クーピー) ・はさみ
 ・ストロー ・セロテープ ・角材
 ・風糸 ・カラービーズ ・ボンド

経費

約4万5千円(900セット)

5 当日の運営と子どもたちの様子

私たちが担当したコーナーは、ネイチャーゾーン「生き物と環境の世界」である。その他にも、エキサイティングゾーン「電磁気と熱の世界」・ドリー



笑顔が絶えない会場

ムゾーン「音と光の世界」・ワンダーゾーン「空気と水の世界」・プレイゾーン「作って遊ぶ楽しさいっぱい」・ミラクルゾーン「不思議体験いっぱい」・ワークショップのコーナーがあり、計84のブースが設営された。

研究会のスペースは長テーブル2台を横につなげた分で、そこに6個の椅子を置いて、子どもたちが座り、制作活動ができるようにした。また、机後ろの壁面には工作の仕方を掲示しただけでなく、野鳥の写真やカレンダーも掲示して、カセットテープで鳥の声を流し雰囲気づくりを工夫した。

初日は互いに不慣れな面が多く、親子が椅子と椅子の間にも入り込む状況となり、一時は黒山の人だかりといった状態で、うれしい悲鳴を上げる盛況ぶりだった。そこで二日目は、「次の人は椅子の後ろに1列にならんでください。」という貼り紙をしたことで、混乱状態は回避することができた。しかし、終了まで人の列は絶えなかった。指導にあたった先生方は、休み時間をとる間もなく、子どもたちの対応に追われた。参加した子どもは2歳から中学2年生まで、なかでも5歳から9歳が多く、小学2年生が最も多かった。

ライジングバード用の原画としては、シジュウカラ(熊本市の鳥)・ヒバリ(県の鳥)・コゲラの計6枚(図1)を準備した。

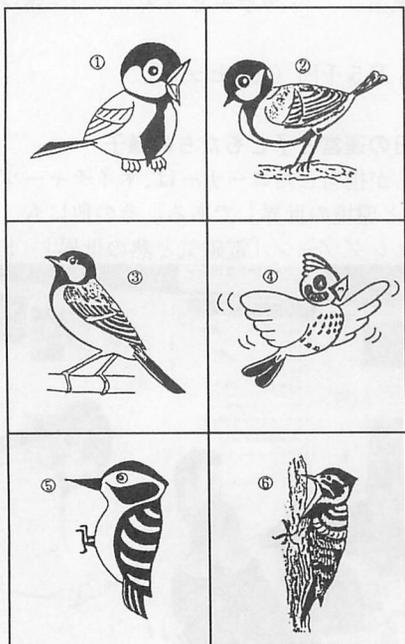


図1

制作手順は、資料の通りである。

まず壁面に貼った①～⑥の原画から希望の絵を選んでもらう。この時点で子ども自身が選ぶ場合と、保護者が「こっちがいいよ。」と言って決めてしまう親子関係を目にした。

絵を選んだ後は色ぬりだが、子どもたちは実にたくましく、創造力豊かな色使いをしながら、美しくユニークで実在しない鳥を描きあげていった。

子どもが色ぬりをしている間に、担当者は糸と角材を準備する。角材の穴に糸が通りやすいよう、糸の両端にボンドを少し付けて固めた。色ぬりが終わると、はさみでまわりを丸くカットし、裏にストロー2本をセロテープで「ハの字」に貼りつけた。



色をぬる子とまるく切る子

その後カラービーズを選んでもらったが、頭のビーズと両端のビーズ計3個を選ぶ子どもたちの目はさらにきらきらと輝き、すぐに選べる子と、しばらく戸惑う子に分かれた。また3個の色合いも、すべて同色を選ぶ子、両端の2つが同色で頭1個を異なる色にする子、3個とも異なった色を選ぶ子とさまざまだった。最も多かったのは、2個を同色にした子どもだった。



戸惑いながらビーズを選ぶ子

最終段階はいよいよ組み立てである。糸を二つ折りにしてビーズを通し、豆結びをして頭を作る。次に角材に互い違いで糸を通す(資料参照)。糸は先をボンドで固めてあるから通りもよく、子どもたちの作業ははかどった。さらに角材の両端から出た糸をそれぞれストローに通し、両端にビーズをくくりつけて出来上がる。



角材に糸を通す子

この作業に一人が要する時間は10分から15分である。作品が出来上がると昇るかどうかを最終チェックする。この時が子どもたちが最も夢をふくらませる場面である。頭のビーズ部分を持ってやると、子どもたちが両端を交互に引っ張り鳥の絵が登っていく。それを食い入るように見つめる子どもたちの脳裏は別世界に入り込んでいることがよくわかる。つまり創造性をかきたてる瞬間であり、子どもたちは笑みを浮かべ大満足していた。



最終チェックをする子

6 関係者数(マンパワー)

このイベントに関わった人数は、次の通りである。

事前準備	4名	前日設営	3名
一日目担当	10名	二日目担当	6名
計19名			

7 参加者と使用原画数

二日間の参加者は643名で、使用した種類ごとの原画枚数は(表1)の通りである。

番号	①	②	③
枚	128	103	163
番号	④	⑤	⑥
枚	76	82	91

最も人気が高かったのは③番のシジウカラで、私の予想は大きくはずれた。というのも、私は子どもたちがリアルな絵よりマスコットの的な方を希望すると考えていたからである。

8 教育評価

この制作活動を教育の面から評価すると、次のような点が考えられる。

- ① 色をぬることで、鳥の形態を学べる。
- ② 糸通しなどの操作で、手先の細やかな技能を高められる。
- ③ 原画やビーズの選択により、自己決定力を養うことができる。

9 まとめと感想

イベントを企画運営するには、準備から当日の運営まで大変な面が数多かった。しかし、それはまた楽しく充実した時間を過ごす機会でもあった。特に今回の取り組みでは、制作意欲旺盛な子どもたちの姿を目の当たりにすることができ、現代の子どもたちはとかく映像文化に走りがちではないかと心配していた私は、その思いを払拭することができ、子どもたちに力づけられた思いがした。また、子どもたちの透き通った瞳と豊かな創造力、そして屈託のない明るい笑顔と純粋な心に、私の心も洗われる思いがした。

今後も、21世紀を創造する子どもたちに、より多くの実体験と創造性あふれる心を育む場の確保が必要であることを確信しつつ、子どもたちのために次のステップの展開ができるよう、会員の先生方と研鑽していきたい。

(資料) 「実験解説集」掲載内容

ライジングバードを作ろう

熊本市立芳野小学校 松田史哉 熊本市立出水南中学校 田中 忠

●どんな工作なの？

2本のひもを交互に上下にすると、アラ不思議。

お気に入りの鳥が、スルスルとのぼっていきます。この鳥には、どんな仕組みがあるのでしょうか？

●工作のしかたとコツは？

① のぼせたい鳥を決めます。(鳥の選択)

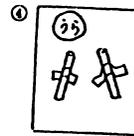


② 色鉛筆で色ぬりをします。

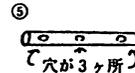
③ ストローを2cmの長さに切ります。



④ ③で切ったストローを、鳥の絵の裏に、「ハ」の字型にセロテープではりつけます。



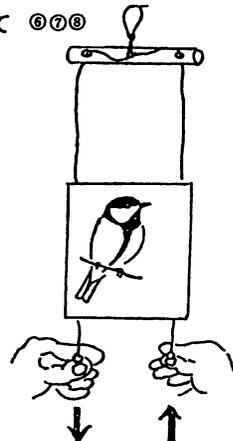
⑤ 角材に3つの穴があいていることを確かめます。



⑥ たこ糸を2つに折り、その中心を角材の中央の穴に通して ⑥⑦⑧ 5cmくらいで結び目を作ります。

⑦ たこ糸の両端を左右の穴に通します。

⑧ 貼りつけたストローにたこ糸を通し、結び目を作ったらできあがりです。



●気をつけよう

ストローを「ハ」の字型にしないと、鳥はのぼりませんよ。

●もっとくわしく知るために

糸を横に張り、ストローの向きを工夫すると、鳥が逃げたり、近寄ったりします。

(参考図書)

「小学校図画工作教科書」 (2年) 開隆堂

ウォッチングのヒント

望遠鏡+液晶ビデオカメラ

常務理事 平田 寛 重

野鳥観察の際、望遠鏡を使って、多くの子どもに鳥を見せてあげることができればいいなと考える方は多いのではないのでしょうか。今回は、通常1人でしか見られない望遠鏡の鳥を複数の児童で見られる裏技を披露しましょう。……と言っても、しかけは裏技というほどのことではありません。

原理は、望遠鏡に液晶モニター付きビデオカメラを接続し、モニター画面に映し出される望遠鏡による拡大映像を複数の人間で見ようというものです。

望遠鏡とビデオカメラを接続するためのアダプターとして、「マルチビデオアダプター」という商

品が5万円(税別)で日本野鳥の会より販売されていますが、現在は品切れです。

最近、光学メーカーのミザール社から廉価版(定価7800円)の「ビデオプレート」という商品が出ましたので、今回はそれを紹介したいと思います。

写真を見ればおよそどんなものであるかはおわかりいただけると思います。ただし、購入の際は、手持ちの機材との相性を確認してください。金属プレートを組み合わせたものですので、作りとしてはそれほど強い物ではありません。そのため、ぶれやすく見づらい場合があります。

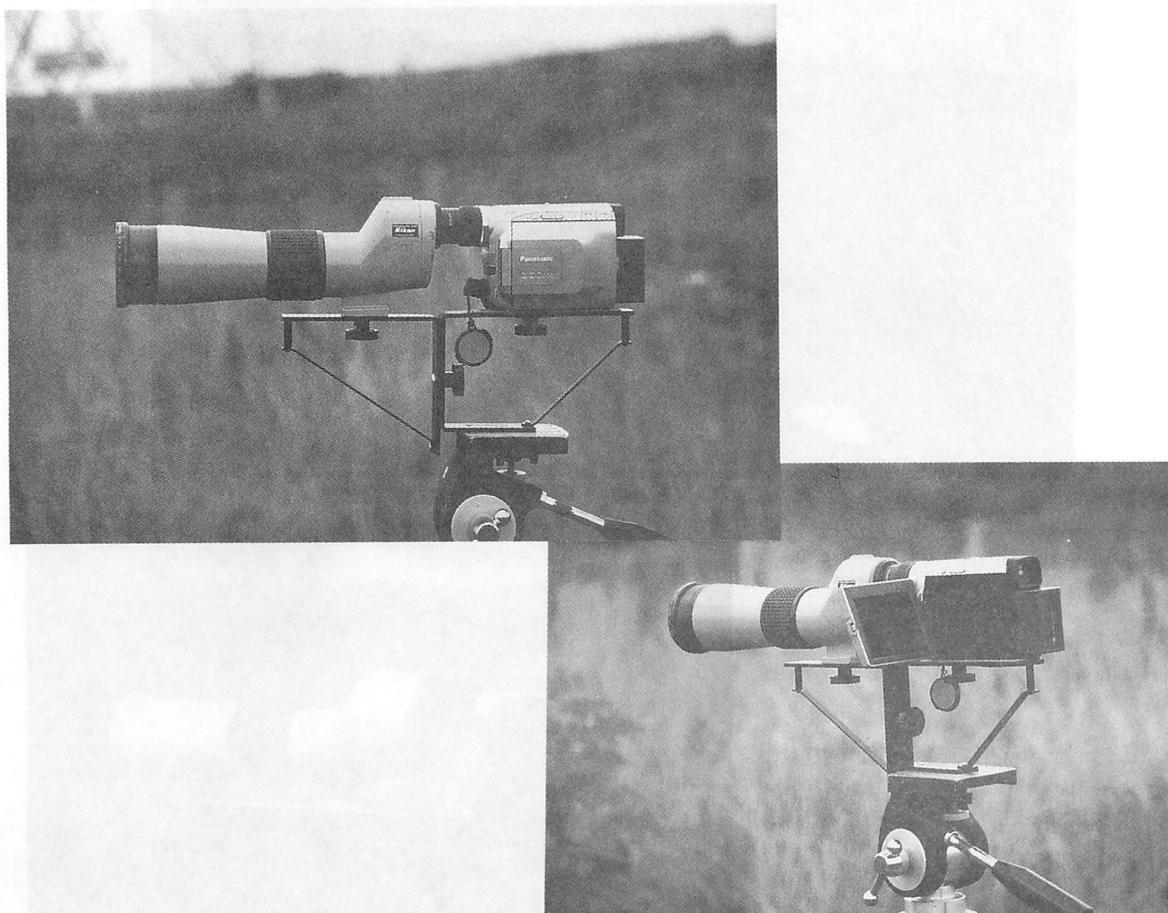


写真1：望遠鏡+液晶ビデオカメラを三脚にセットしたもの

望遠鏡の接眼レンズは20倍、ビデオカメラの方は10倍程度にすると、視野のけられがなくて見やすいようです。しかし、実際に使ってみると、視野に目標の鳥を入れるのは、思ったほどには楽ではありません。望遠鏡が20倍でビデオカメラが10倍ということから、全体としては200倍ということになりますが、拡大された分、視野が狭くなるからです。

そのため、肉眼または双眼鏡で見つけた鳥がなかなか液晶画面の中に入りません。また、入ったとしても三脚の雲台を固定する時に若干のずれが生じ、鳥は視野から消えてしまうということも起こります。そして、そのちょっとずれた分を元に戻すとい

う作業がなかなか大変なのです。慣れるまでに時間がかかります。

目標の鳥のそばに目立つ目印でもあると探すのも楽なのですが、ヨシ原でオオヨシキリを探したりする場面では苦労します。また、動く個体を見ようとしても、画面に入れるのは大変に難しいものです。従って、囀っている場面など、対象の鳥がしばらくの間移動しない状態のものを目標にするのがよいでしょう。

モニターに大きく映し出されたオオヨシキリの姿を見て、子どもたちは大変に喜んでいましたので、効果は大です。



写真2：モニター画面をのぞき込む子どもたち

ビデオカメラ用の金具がなくても、カメラ用のプレートと雲台をうまく組み合わせることでそれなりの台を作ることができます。

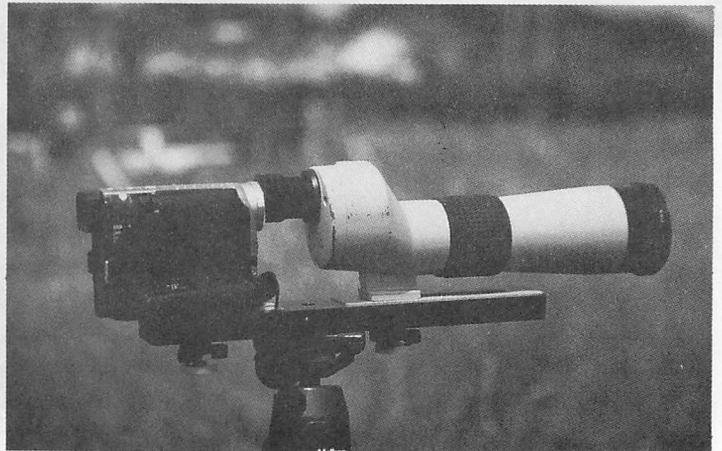


写真3

生命（いのち）に思いを馳せること

事務局 箕輪 多津男

昨今は、学校教育においても、また社会教育においても、いわゆる「環境教育」の重要性がますます叫ばれるようになってきており、21世紀に向けてこの流れがさらに好ましい方向に発展していくことを、私も切に願っております。

さて、一概に「環境教育」と言っても、そこで取り扱われる分野は広大で、実に様々な要素を内にはらんでいます。マクロな視点からは、地球温暖化やオゾン層の破壊、熱帯森林の消失や砂漠化、あるいは海洋汚染、等々。一方、ミクロというより普通の生活における最も身近な視点からは、ゴミ問題やリサイクル、地元の川の水質や空気の汚れ、あるいは食べ物の問題、等々。少し考えただけでも枚挙にいとまがありません。

ただ、ここで一つ気になることがあります。それは、環境教育という広大なフィールドにおいては、大半の場合やはり人間が存在の中心になっているということです。さらに極端な言い方をすれば、環境教育を推進する過程において、人間以外の生き物、特に動物が全く視野に入っていないケースが非常に多いということです。自然環境、殊に野生生物を普段から相手にしておられる方々にとっては、「そんなばかな」と思われるかも知れませんが、実際には、現在様々な形で進められている環境教育の対象分野の中で、人間以外の生物を取り上げているケースは、全体からするとときわめて少数であると言わざるを得ません。

実は私も以前、某機関にて地球環境問題に取り組んでいた時期があり、その際、地球の大気、海洋環境、土壌や砂漠化、あるいは有害物質の問題等、様々な要素について検討あるいは研究をしておりました。同時に、そうした分野についての環境教育の推進についても、広報活動も含め取り組んでおりましたが、そうした中で、CO₂の吸収や気候変動等との絡みで熱帯雨林を取り上げたりすることはあっても、そこに生息する野生動物にまで視線が向けられることは、まずありませんでした。逆に、私が「野生動物を時には対象に」などと提案しても、周囲の研究者はだれも見向きもしてくれないという状態で

した。従って、そこで推進された環境教育においては、野生生物、殊に動物は、必然的に登場の機会をほとんど与えられなかったということになります。（最近ではゴミ問題との絡みで、カラス等が取り上げられることはあるようですが）

そこで、こうした現状から、「愛鳥教育」といった、野鳥すなわち野生生物をその中心に据えた教育活動の普及が、改めて大変重要であると痛感している次第です。

野生生物をダイレクトに取り上げることの最も大きな意義、それは「生命（いのち）」について考えるということではないでしょうか。大気や水質、あるいは土壌の汚染等について、化学物質やテクノロジーの面から数値として表し、人体への影響等について考えることも重要ですが、そこから、自分の身の安全、あるいは普通の生活の安全確保といった認識は大いに育まれてくるでしょうが、生命そのもののダイナミックな姿と環境との直接的な繋がり等については、なかなか意識に上ってこないのではないかと思います。

自分の生命、もっと言えば人間の生命を見つめ、それをかけがえのないものとして認識するためには、人間以外の野生生物の姿を見つめ、そのことにより、普遍的な生命の存在を意識する必要があるように思われます。環境教育の意義を考える時、その究極には、やはり生命の尊厳の認識ということが横たわっているものと考えます。この場合の生命というものは、通常は「人間の」ということになるのかも知れませんが、これと同等に他のあらゆる野生生物の生命の尊さに思いを馳せることができるのであれば、環境教育の未来は、永遠に輝きを放つことにもなるでしょう。それ故に、野生生物を介した環境教育は、今後何人にも不可欠なものになってくることは間違いないものと確信しております。

少々話が大きくなってしまいましたが、野生生物を対象とした環境教育ということであれば、「愛鳥教育」以外にもいろいろ考えられるかもしれません。魚を中心に据えれば「愛魚教育」となるのでしょうか。昆虫ならば、「愛虫教育」というのはいい

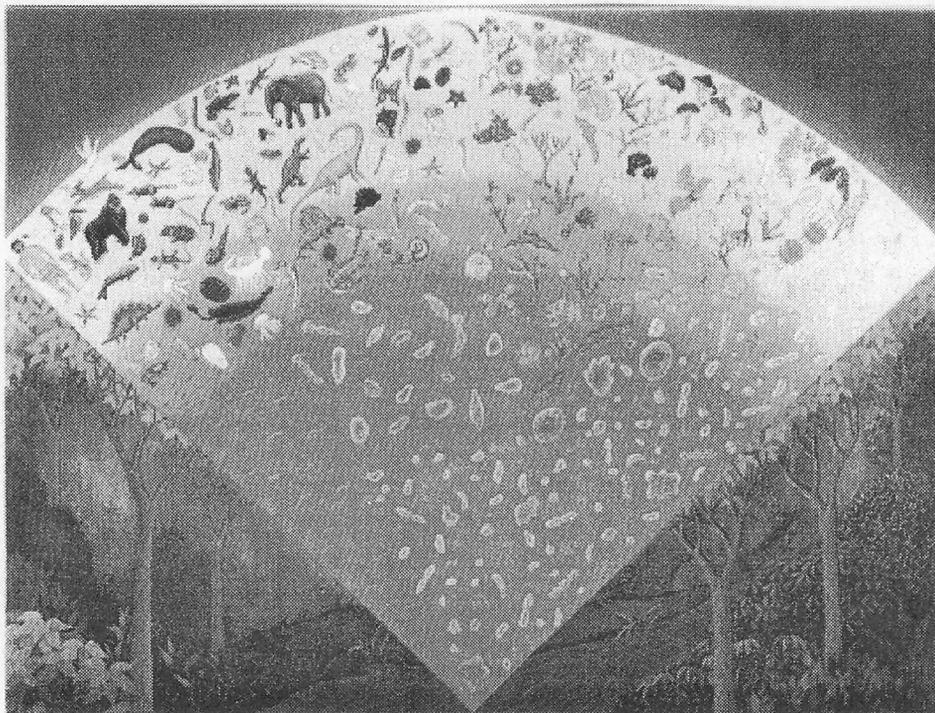
かがでしょう。この他にも「愛獣教育」や「愛植教育」、場合によっては「愛菌教育」などというものも浮かんできます。この世界には、無数の生物が存在しているのですから、入り口となる対象は様々あっていいはず。重要なのは、入り口はそれぞれ違っていても、進んでいくにつれて、必然的に他の様々な異なる生物の存在を知るようになり、やがてそこから生命の普遍的な尊さを感じられるようになっていくという、そのプロセスであると思われます。

私たちの住むこの地球は、生命を宿す「奇跡の星」と言われます。その誕生から今日までの歴史は、ざっと46億年。生物の歴史は38億年とも40億年とも言われています。そのうち、人類の歴史は500万年程。いかに新参者であるかがうかがえます。しかし、こうして生物の歴史に思いを馳せてみると、気の遠くなるような思いと同時に、まさに今存在している自分も含めた生物の姿に奇跡を感じざるを得ません。というのも、考えてみてください。誰もが知っている通り、生物は生物からしか生まれません。ということは、今地球上に存在しているあらゆる生物は、その誕生を遡っていくと、この地球上に初めて生物(生命)が誕生した瞬間に繋がって

いることになる訳です。その間、一度も遺伝子が途切れることなく何らかの形で受け継がれてきているわけです。生命のものすごさにただただ圧倒されるばかりです。

ここで最後に、一つの図を紹介したいと思います。これは、大阪府高槻市にある生命誌研究館(館長:岡田節人先生、副館長:中村桂子先生)の制作した生物の「進化系統図」です。既にいろいろところで紹介されているので、ご存じの方も多いかも知れませんが、私はこの図を見つめる度に、まさに生物(生命)の誕生から今日までの歴史が凝縮されていると感じる次第です。38億あるいは40億年とも言われる生物(生命)の歩みを、見事に象徴しています。生命誌の「誌」という言葉には「物語」という意味が込められているとのことですが、この図に秘められた生命のドラマは、言うなれば奇跡の連続によって成立してきたと言えるでしょう。

生命に思いを馳せ、生物の奇跡の歴史について語り継いでいくこと。当たり前のことかも知れませんが、「愛鳥教育」あるいは「環境教育」の推進にあたって、このことは他にも増して重要であると、強く確信する次第です。



生命誌研究館が制作した「進化系統図」

もりまき通信(8)

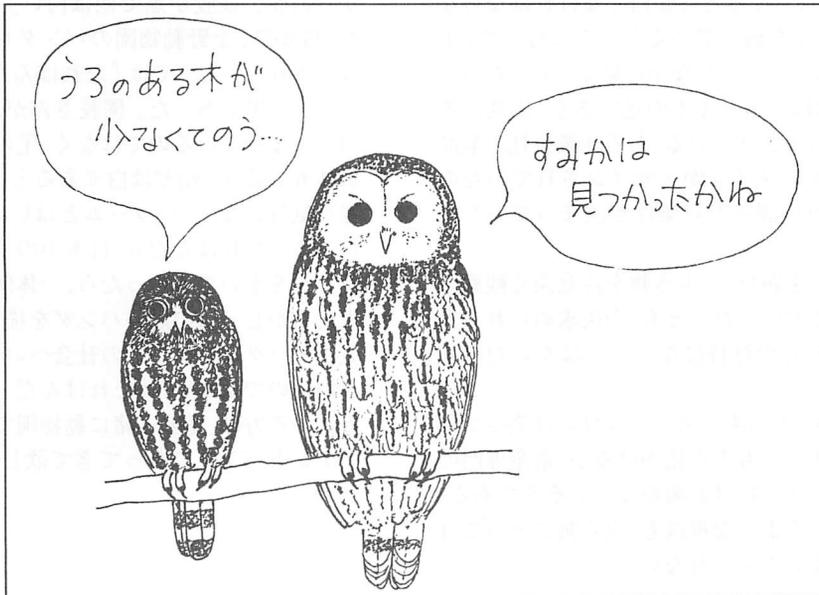
ふくろうの足元

自然観察指導員 森 真 希

●キャラクターになりやすい生き物たち

色々なお店で生き物ウォッチングをしてみる。実に様々な生き物がキャラクター化、デザイン化され、商品となっている。最近よく目につくのは「たればんだ」。朝日新聞のコラム欄にまで話題がのぼった。付加価値をつけるものとして商品をデザイ

ンする側の苦労や試行錯誤がうかがえる。「そんなことはどうでもいいじゃないか」と言われればそれまでであるが、今回は、おや?と感じた「デザイン化されている生き物」について触れてみようと思う。



●ふくろうの足元チェック

鳥に興味のある方でフクロウの仲間が特別好きという人は少なくないであろう。木の彫り物をはじめとして、陶器製、ガラス製、焼き物などの置物が土産物屋でもよく売られている。私自身、フクロウの事を話し始めたら止まらなくなるタチなので詳しい説明は省略させていただくことにしよう。

フクロウ目は日本で約10種、世界で約140種の仲間がいるといわれている。フクロウの仲間は、鋭い爪を持つ丈夫な対趾足で獲物を捕える。対趾足とは足の指が前2本、後2本に分かれている足のことで、キツキ類も同様の足をしている。狩りをするときにはたまに前3本指で襲いかかっている記録もあるが、ものに止まっているときには、大抵指2本が見えている状態となる。

このことを知ってから、フクロウが使われている商品を見ると、指がどうなっているかについて目が行くようになってしまった。貴金属売り場でも指輪やネックレスにフクロウ類をモチーフにしたものがあり、2本指も3本指も両方が売られていた。ある美術展にいった折に見た、横山大観の「木菟」、上村松篁の「春宵」に描かれているオオコノハズクとコノハズクは、ちゃんと足から2本の指が見えていた。描くものに対する観察の心が伝わって来たように思えた。可愛ければそんな細かいこと気にしなくてもいいじゃないとの声もあるが、作った人の思いが見え隠れする「フクロウ類の足元チェック」、興味がある方はお近くのフクロウグッズを確認してみたいかがだろうか。

●ホルスタインの条件

私事であるが、趣味でヨーグルトの蓋を集めている。特に深い理由があるわけではないが、私たちが頻りに食べている食品にどれだけの種類があるのか集めてみようと思いたった。ついでの繰り返して収集してみたら、ヨーグルトだけで600種以上の商品が出回っていたのだ(1994年から)。恐らく、今後も各社が色々な新製品を販売していくことだろう。本題は、このヨーグルトをはじめとする乳製品の容器によくかかっているホルスタインである。

世界中で広く飼育されているこの白黒の牛、和名はロツパクギユウ(六白牛)という。その名の通り、体の6ヵ所が白い。ではどこが白くならないのか。実際に牛を飼っているところに行き、子供たちに是非スケッチをしながら見てもらえたらと思うが、答えは額と尾と4本の足である。広狭の差はあるが必ず白とされている。ある乳業会社の製品で尾が黒いホルスタインがデザインされていたので、おや?と思い調べたら条件が決まっていたのだ。

ホルスタインを題材に、生き物を注意深く観察する機会をつくらるといったことも、今後求められる自然教育・環境教育の材料になるのではないだろうか。

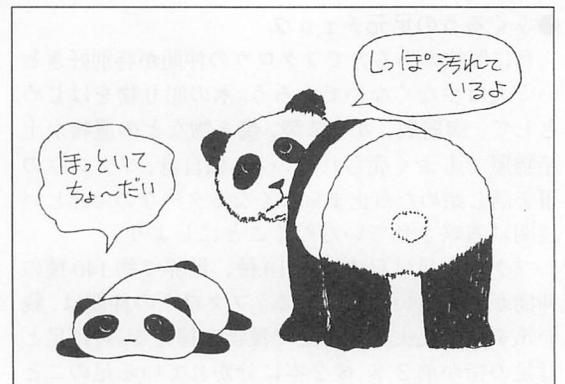
余談であるが、牛が歯を出してニコニコ笑っている漫画的なデザインもよく見かけるが、畜産専門の方に言わせたら「牛には前歯がない」そうである。重箱の隅をつつくような視線も、売る側にとってはあまり有難くないかもしれない。



●「たればんだ」のしっぽ

白黒模様のお話をもう一つ。冒頭でも触れた「たればんだ」は、パンダをモデルにした人気キャラクターである。正式和名ジャイアントパンダ。世界でも絶滅が心配されている動物の一つで、現在1100～1500頭が生息していると考えられている。インターネットのホームページでもパンダで検索すると数百件のヒットがあり、世間の関心の高さを感じる。

さて、クイズでもよく出題されるネタらしいが、パンダのしっぽは黒か白か、というお話である。あるホームページで調べたところ「耳、目の周り、肩から前肢、後肢が黒で他は白い」と記載されていた。確かに、上野動物園のパンダも白だと園長さんは話されていた。では「たればんだ」のしっぽはどうか。…黒であった。園長さんがおっしゃるには、白と決まっているのではなく、尾の部分が薄茶色の個体もいるが、殆どは白であるとのこと。これは複雑な気分になった。ブームとはいえ、あちこちで目に入る「たればんだ」。日本中の子供たちに、もしパンダをかいてもらったら、一体何パーセントの子供たちがしっぽの黒いパンダを描くのだろうか。人気キャラクターグッズの社会への影響は、決して小さいものではない。「たればんだ」の好きな人が身近にいる方は、是非一緒に動物園で生きているジャイアントパンダに会ってきて欲しいものである。



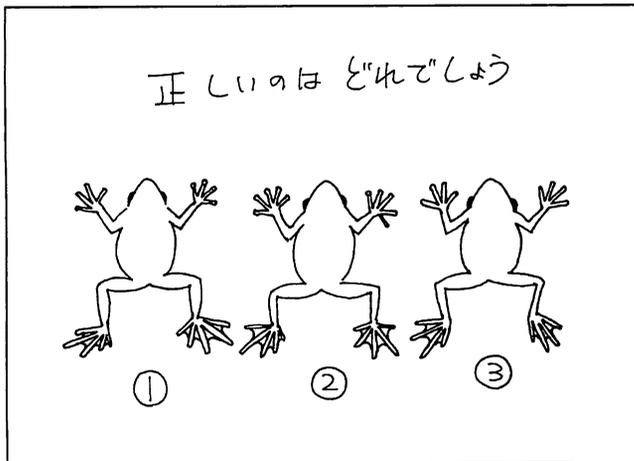
●カエルの手足

それは電車の吊広告で見かけた、有名私立中学の入試問題だったと記憶している。問題は、次のうち正しいカエルはどれか選べというもの。3匹のカエルが腹ばいに並んでおり、それぞれの手足の指の本数が注目ポイントとなっていた。

今年の夏、千葉県立中央博物館で「カエルのきもち」という特別企画展が開かれた。カエルの生態から環境問題、人との関わりなど、カエルを切り口に様々なテーマが取り上げられていた。そのなかで一際目立っていたのがカエルグッズコレクションのコーナーである。とにかく、数と種類の多さには目を見張るばかり。Tシャツ、置物、掛軸、ぬいぐるみ、小物入れなど所狭しと陳列されていたのだ。

そして、視界の端に入ってきたカエルのティーポット。ポットの蓋のつまみがカエルになっている素敵なおもちゃであった。よくよく眺めて見ると前肢の指4本、後肢の指5本でつくられている。「なんて忠実につくってあるのだらう！」。製作者のそのこだわりに小さな感動を覚えた。

世界に4000種ほど生息しているカエルの仲間、その殆どが上記のように前4本、後5本の指を持っている（当然例外もあり）。カエルは、デザイン化されキャラクターグッズになる際、見づらい手足の指はどうしても省略され、アバウトに表現される傾向が強い。指の本数は、カエルグッズを見るとき、作った人がどれだけカエルが好きなのかを感じる一つの指標になるかもしれない。



●本物に会ってみよう、触ってみよう

可能であればキャラクターグッズになっている生き物たちを実際に見に行ってみよう。夏になったら夜の神社にそっと行ってみよう。虫を食べているアオバズクに会えるかもしれない。牧場に行ってみよう。草を食んでる牛さんが近寄ってくるかもしれない。柵越しだったら長い草を口元に持って行ってみよう。美味しそうに食べてくれるかもしれない。動物園に行ってみよう。テレビや写真では感じるののできない何かを見つけられるかもしれない。田んぼに行ってみよう。カエルをつかまえてみよう。ぬめぬめした感触は図鑑では経験できないことだから。

●生き物キャラクターたちを見て改めて感じる

今の日本の若い世代は「したことがない」という項目が多いという話はあちこちで持ち上げられている。稲刈りをしたことがない、虫とり・魚とりをしたことがない、キャンプをしたことがない、芋掘りをしたことがない、川や海で泳いだことがない、一つ一つあげていっていったらページが埋まってしまうくらいである。ほんの数十年前まで、当り前に原体験として子供たちがしてきたことがされていない。社会背景の流れだからしかたないと片付けられるテーマではないだろう。しかし、残念なことに、自然や食に関する体験をしてみたいと思っても、人口の多い都市ではお金を払ってそのようなプログラムの企画に参加せざるを得ない状況にある。家庭や仲間や地域の中で、ごくごく自然体で生き物や作物にふれあう機会を作っていく環境が増えていけば、と願わずにはいられない。

書籍紹介

常務理事 平田寛重

愛鳥教育関係者にとって必携の書となる本が出版されたので紹介します。

1冊目は、傷病鳥や雛の保護・飼養に関する本で、図版を効果的に使った実践的マニュアルと言え

るものです。

2・3冊目は、これまた、現場で欲しかった鳥の巢の図鑑2点です。類書が無かった分野なので重宝されることと思います。

◇ 浜口哲一監修『野鳥をたすけるはじめの一步』野生動物救護獣医師協会（WRV）1999年

愛鳥教育に取り組んでいると、子どもたちが傷ついた鳥や雛を拾ってくることもある。子どもたちは、何とかして目の前の鳥たちを助けたいと思い、教師の所に持ってくるが、教師は、どうしたらよいのか途方に暮れてしまうことが少なくない。とりあえずは、応急処置をして、都道府県庁の野生動物保護担当係に連絡をして指示を仰ぎ、然るべき施設（野生生物保護施設）に届けることになる。場合によっては、役所に許可をもらい、しばらく傷ついた鳥を飼養することも考えられる。そういった応急処置や飼養の際に役に立つ1冊である。

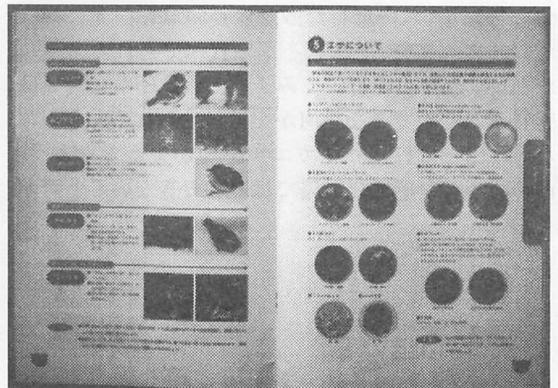
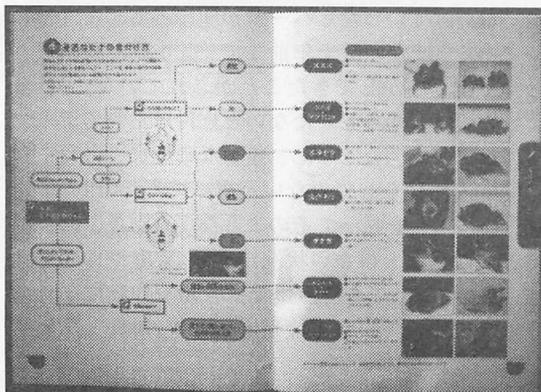
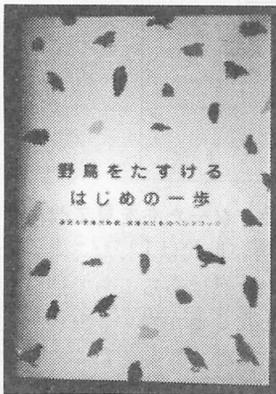
傷ついた鳥を見つけたからといって、保護すれば

よいというものではない。基本的には、野にいたことが優先なのである。雛の場合は、持ち帰る人が多いので特に注意する必要がある。具合が悪くて保護する場合でも、野生復帰を目指して取り組むべきである。こういった、傷ついた野鳥や雛とどのようにかわったらよいかということについて、チャートを使いながら基本的なことについてわかりやすく説明してある。

また、よく拾われる種の雛の見分け方についても写真を使ってわかりやすく解説されている。その他、餌についても、写真を使って、種類や体長に応じてどんなものが適切かがわかりやすく紹介されている。また、保温の方法や強制給餌のやり方からリハビリに至るまで、写真やイラストを使って、懇切丁寧に解説がなされている。

A4版40ページのこの冊子は、傷ついた野鳥や迷子の雛の救護について、実際に野鳥保護施設の現場で治療をしている方々が、自ら作り出したノウハウの要所を押さえながら解説している点が評価できる。

応急処置、給餌、治療、看護、リハビリ、野生復帰にいたるまで写真とイラストを要所に効果的に使い、簡潔明瞭に説明されているので、現場ですぐに役に立つ1冊である。



1部1500円。購入、問い合わせについては、下記まで。

野生動物救護獣医師協会 (WRV)

TEL. 042-529-1279 FAX. 042-526-2556

鳥の巣に関する本2冊の紹介



◇ 鈴木まもる著『鳥の巣の図鑑』 岩崎書店刊
1999年

この本は、岩崎書店の絵本図鑑シリーズの1冊であるが、どちらかと言うと子ども向けのものである。

初めに巣についての基本的な解説がなされ、次いで30種あまりの巣の形や作り方がイラスト付きで解説されている。また、カッコウ類の托卵の話や巣箱やねぐらの話、外国産のユニークな鳥の巣についての話、更には鳥以外の動物のネズミヤリスの巣についてもページがさかれている。

巣の写真は、著者が採集した古巣がモデルになっていて、イラストのモデルとしても使われている。身近な鳥のほとんどの種類が掲載されているが、カワラヒワの巣がないのが残念である。

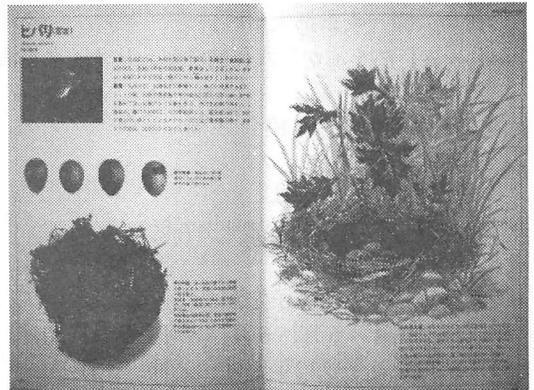
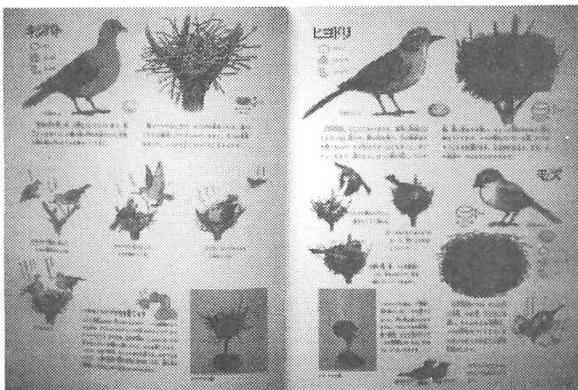
子供に鳥と巣について話をしたり、解説したりする場合にとっても役に立つ本である。

◇ 柿澤亮三・小海途銀治郎著『巣と卵図鑑』
世界文化社刊 1999年

この本は、執筆者である小海途銀治郎氏が、34年にわたって野鳥の古巣を採集して標本として保存したものを写真で紹介し、それに柿澤氏が、その種の卵と巣のイラスト、成鳥の写真を添えて解説したものである。

120種類の巣を標本として保存するための著者の努力の跡が見て取れるばかりでなく、イラストでその生息環境が表され、繁殖についての解説もなされており、巣を同定する際の資料として十分に活用できるものである。ただし、どちらかと言えば、大人向け、専門家向けと言えるかもしれない。

また、細かく見ていくと、例えばカワラヒワの巣のように、市街地のものではなく、人工物も使われていないタイプもあり、街路樹などにかかっている巣とは若干イメージが異なっている場合もある。



平成11年度 事業計画

事務局 箕輪 多津男

1. 「愛鳥教育」の発行

(1) 58号、59号、60号を発行予定

(2) 内容

- ① 愛鳥活動の「実践報告」等を掲載。
- ② 子供向け野外ワークショップの紹介。
- ③ 論説を随時掲載。
- ④ 平成11年度夏期野鳥観察会、冬期野鳥観察会等の報告を掲載。
- ⑤ 書評等を随時掲載。
- ⑥ その他の事項。

2. 観察会・講演会等

(1) 講演会

期日：平成11年11月12日(金)

場所：東京都生涯学習センター・セミナー室

内容：「野鳥保護団体は、今」

講師：全国愛鳥教育研究会顧問
松田道生氏

(2) 冬期野鳥観察会

期日：平成12年1月30日(日)

場所：都立水元公園（東京都葛飾区）

内容：初心者の親子連れを対象に、自然とふれあうことを目的に実施。

3. 後援・協力行事

(1) 「地球と遊ぼう '99 イン大田 (OTA) ふれあいフェスタ」

平成11年10月23日(土)～24日(日)

平和島公園（東京都大田区）

※公園の自然を活かした体験学習とリサイクル活動

(2) 財せたがやトラスト協会 主催

「トラストバードウォッチング」

平成11年12月11日(土)

兵庫島河川公園（東京都世田谷区）

4. 常務理事会（開催予定）

平成11年4月、5月、6月、8月、9月、10月、11月、12月、平成12年1月、2月、3月

5. その他の行事・審査会への参加

(1) 第53回愛鳥週間全国野鳥保護のつどい（香川県）
平成11年5月16日(日)

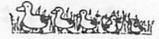
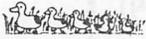
(2) 愛鳥週間ポスターコンクール及び全国野生生物保護実績発表大会審査会（環境庁）
平成11年10月15日(金)

(3) 全国野生生物保護実績発表大会（環境庁講堂）
平成11年11月29日(月)

(4) 愛鳥週間野生生物保護功労者選考会（環境庁）
平成12年3月

6. 出版物等

愛鳥教育に関するマニュアル（タイトル未定）の編集作業を継続。平成12年に発行予定。



トラスト バードウォッチング [入門編] ミニ野鳥図鑑(KEY BIRD50・秋編)を使ってバードウォッチング!

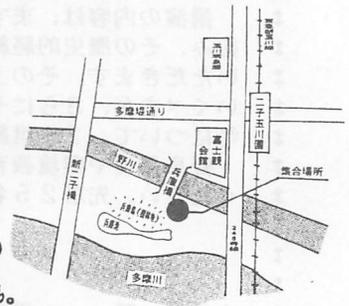
せたがやトラスト協会の《トラストバードウォッチング》は、今年も12月の第2土曜日に二子玉川の兵庫島河川公園で行います。

冬鳥たちが多く見られる最高のシーズンに、だれでも参加できる最もやさしいバードウォッチングを行います。どなたでも、お友達をさそいあつて気軽に参加してください。

次の内容と申し込み方法をよく読んで応募してください。お待ちしております。

- ◆ **日時** 平成11年12月11日(第2土曜日)
午前9時15分～11時30分(受付は9時～)
- ◆ **場所** 兵庫島河川公園(集合場所は「兵庫橋」です)
(東急新玉川線「二子玉川園駅」より徒歩3分)

※9時15分までに、兵庫橋に直接集まってください



- ◆ **持ち物** 筆記用具と雨具。(双眼鏡・望遠鏡がある人はもってきしょう)
もっている人は「ミニ野鳥図鑑(KEY BIRD50・秋冬編)」も。
(※当日、受付でも販売しています。1冊50円です。)
- ◆ **服装** 冬の河原は風が強く大変寒いです。毛糸の帽子や手袋などであたたかくし、はきものは歩きやすいものがよいでしょう。
- ◆ **参加費** 無料です
- ◆ **雨天の場合** 中止 ※なお、当日天候により判断のつかない場合は、

せたがやトラスト協会 ☎3789-6112へ午前8時～8時半までにお問い合わせください。

- ◆ **注意** 子どもたちどうしの場合は、家族の人に「いつ・どこで・だれと」を必ず言ってから参加しましょう。

[申し込み方法] (傷害保険加入の為、次の項目①～④をお書きください)

(ハガキで)

しめ切り

12月10日(金)必着!

- ① 「トラストバードウォッチング」参加希望と書いてください
- ② 名前 (家族や友達も参加する場合は全員の名前と人数)
- ③ (団体・グループの場合) 代表者の住所と氏名、年齢、電話番号
- ④ 学校での参加の場合は学校名と学年もお願いします

☎157-0066 世田谷区成城6-2-1 (財) せたがやトラスト協会

「トラストバードウォッチング」係まで お申し込みください。



主催：(財) せたがやトラスト協会

後援：(財) 日本鳥類保護連盟

全国愛鳥教育研究会



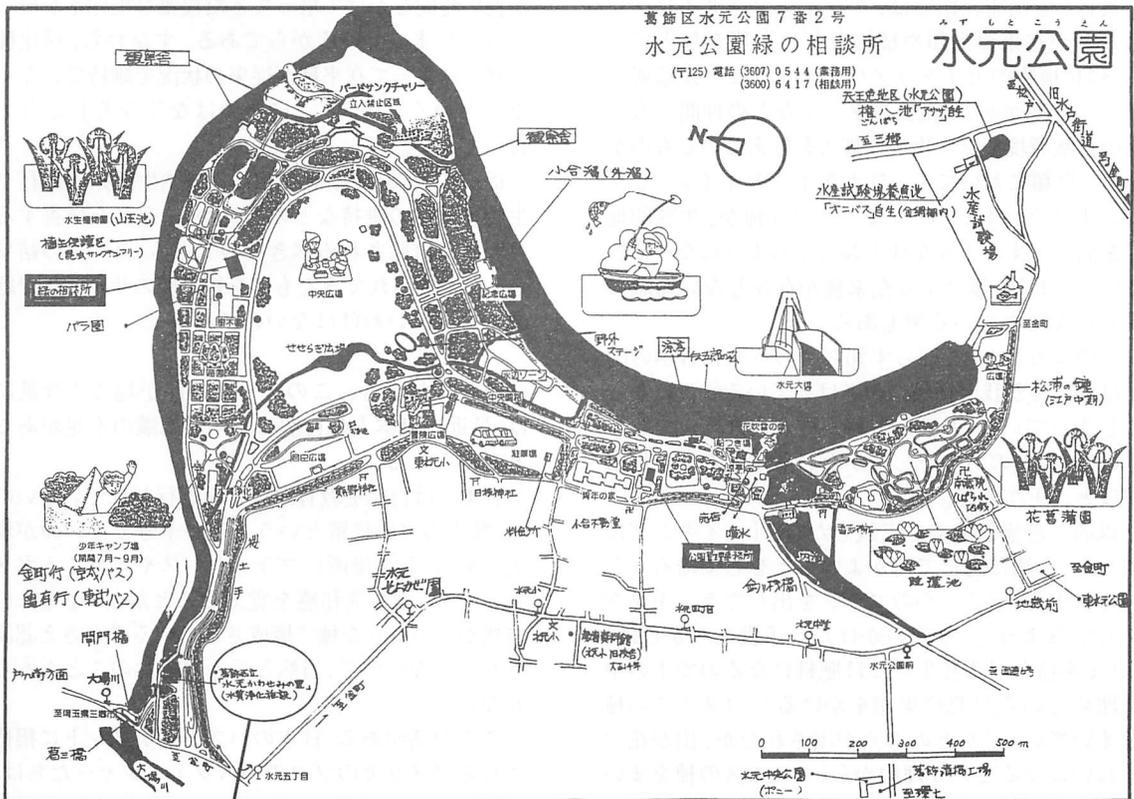
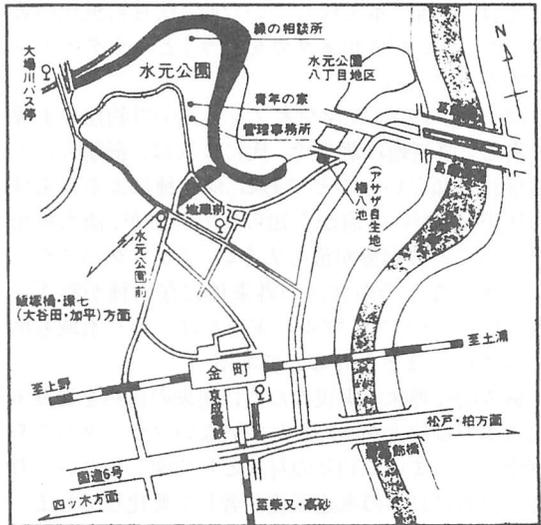
水元公園親子探鳥会のご案内

都心近くに位置していながら比較的野鳥が見られる江戸川。その中でも冬の水元公園はバードウォッチングに最適の場所です。目の前にカモや

カモメたちがやってきます。ちょっと寒い季節ですが、親子でゆっくりと野鳥の観察はいかがでしょうか。みなさんの参加をお待ちしています。

日 時：平成 12 年 1 月 30 日(日)
 午前 10 時～午後 1 時
 場 所：東京都葛飾区 都立水元公園
 集 合：葛飾区立「水元かわせみの里」
 京成バス、大場川バス停寄り
 (下図参照)
 午前 9 時 45 分

参加費：200 円 (資料代、保険代)
 持ち物：お弁当、水筒、筆記用具、(あれば双眼鏡)
 服 装：歩きやすい靴、暖かい服装、手袋など
 交 通：① JR 常磐線 (千代田線直通) または
 京成線 金町駅下車
 南口バスターミナルから京成バス戸ヶ崎
 操車場行き 大場川バス停下車徒歩 5 分
 ② タクシー
 ③ 自家用車 (駐車場利用)



※集合場所

論 説

在来種の保護について

常務理事 平 田 寛 重

先日、書店で本を探していた時、秋月岩魚氏の著書「ブラックバスがメダカを食う」というタイトルの本が目に入った。

ブラックバスは、今や大ブレイク中の釣魚の1種である。原産地は北米で、氏によれば、密輸入による帰化魚類ということである。帰化種による在来種の圧迫は、だいぶ前から知られているが、淡水魚類においてその影響が最も大きい。ブラックバスやブルーギルなどの肉食性の外来種に在来種が駆逐され、ブラックバスとブルーギルだけという水域も出てきているほどとのことである。

個人的な趣味の実現のために在来の自然を省みずに日本では放流が認められていないブラックバスを密かにばらまいて釣りの対象として楽しむという考えのために日本の水辺環境が著しく悪化してしまったことが指摘されていた。

最近、帰化哺乳類では、アライグマやタイワンリスなどが在来の鳥類や植物などに影響を与えている。帰化植物のセイタカアワダチソウなどが猛威を揮った時期がある。昆虫やタニシなどの仲間でも在来の自然環境や農作物等に被害を与えているものがある。鳥類においても、ワカケホンセイインコ、ソウシチョウ、ガビチョウなどという種が、生態的地位を同じくするような種と競合するようになってきている。また、競合する在来種が存在しない領域に入り込んできている例もある。

このようにして、知らず知らずのうちに日本の国土は移入種が我が物顔にのさばっている状況になってしまっている。外国から移入種が入り込んでしまうのは、故意のあるなしにかかわらず人為的な理由がほとんどである。

以前、道徳の授業を实践した時、「ハイキングに来た際、自然に対して何かよいことをして帰ろうという状況で、いくつかのプランを出してランキングをしてみよう。」と問いかけた。子供たちからは、「ゴミを持ち帰る」「生ゴミは肥料になるので土の中に埋めていく」「鳥の巣箱をかける」「コスモスの種をまいていく」などの考えが出されたが、山が花できれいになるという理由から「コスモスの種をまいていく」を2番目か3番目のランクにする子がほとんどであった。

この時、私は、教育によって自然に対するもの見方や考え方をきちんと身につけさせることの必要性を強く感じた。

では、なぜ帰化種の移入を制限しなければいけないのだろうか？ それは、帰化種によって在来種が圧迫されたり絶滅に追いやられたりすることは決して望ましいことではないからである。

帰化種が移入すると、長い時間をかけて形成されてきた自然が短時間の内につくりかえられてしまい、生物の多様性が失われて単純化してしまうといったことが起こる。一見、その推移が自然の内に進行しているように見えても、これを本来の自然と呼ぶわけにはいかない。そこには、在来の様々な種が長い時間をかけて培ってきた複雑な生態系が無くなってしまっているからである。すなわち、帰化種の移入によって在来種が従来状況の維持できなくなるということは、「自然ではなくなる」とことと言ってよい。

従って、在来種で構成される自然生態系の保存や生物多様性の維持などの観点から、それを妨害する移入種は排除されるべきなのである。自然史の結果として形成されてきたものを短時間のサイクルで絶滅させてよいわけではないのである。

それにしても、このような問題が起こる背景には、最近の日本人の自然に対する認識の不足があると考えられる。

日本では自然史教育がほとんど行われていないので、郷土の自然理解ということが十分でないのが現実である。その場所にブラックバスやアカミミガメがいても、誰も違和感を覚えることがない。その自然がどのような種で構成されているのかさえ認識されていないので、当然と言えば当然のことかもしれない。

こんな話がある。日本のバスターナメントに招待されるアメリカのプロのバスフィッシャーたちは、

加熱する日本のバスフィッシングの状況を見てクレイジーと評価しているというのである。日本には生息しない魚を輸入して河川に放流したらどうということが起きるかは、少しでも自然について学習したのならば理解できるはずである。日本の自然は一部の生物によって攪乱され、取り返しのつかないことになってしまう。自然史教育が十分に行き渡っていればこんなことは起こらないのである。

日本は生物多様性条約に調印しているので、それに伴って国内法の整備も進められているが、在来の自然についての認識を深め、正しい自然観を持てるようにするための教育にも力を入れるべきであると考える。日本の自然が維持できるかについては、現実の問題の対処に加えて、教育による意識改革が重要な位置を占めるのである。

編集後記

ようやくですが、58号をお届けします。

平成11年度は、昨年度に引き続き、講演会・バードウォッチング・親子探鳥会など、各種イベントを行います。お近くの方は奮ってご参加ください。

本号の遅れから、既に終了してしまっているものもありますが、記録として掲載してあります。

また、教員のための研修会を神奈川県横浜市の施設を利用して来年度開催する予定です。それに向けて、現在、理事で準備を進めております。御期待ください。

久しぶりに熊本県の田中忠先生に御寄稿いただきました。簡単な工作からも野鳥に目を向けさせることができるというよい実践例だと思いました。

「もりまき通信」の著者である森真希さんは、御主人が鳥取県米子市の「米子水鳥公園」の職員になられたことから、米子市に転居なさいました。現在、同公園にてボランティアとして御活躍です。

いずれ現地からの報告もいただけるのではないかと期待しております。

(染谷)

愛鳥教育 No.58

平成11(1999)年11月30日

発行人 江袋島吉
発行所 全国愛鳥教育研究会
住所 〒166-0012 東京都杉並区和田3-54-5
第10田中ビル3F
(財)日本鳥類保護連盟内
電話 03-3225-3590
FAX 03-3225-3593
会費 3,000円
郵便振替 00180-7-12442
印刷所 祐文社

愛鳥クイズ (22)

常務理事 平 田 寛 重

【前回57号の問題と解答】

今回は、鳥の鳴き声と名前について考えてみましょう。

鳥の名前には、鳴き声からついたものがいくつかあります。名前の付けられ方にはいくつかのパターンがあります。一つ目は、直接的に鳴き声そのものが名前になった「カッコウ」タイプのもので、二つ目は、鳴き声が他の動物の声に似ていることからつけられた「ウミネコ」タイプのもので、三つ目は、鳴き声から連想されるイメージでつけられた「サンショウクイ」タイプです。ちなみに、サンショウクイの名前は、「ピーリピーリ」の鳴き声如山椒を食べてヒリヒリする感覚からきています。

では、カッコウタイプ、ウミネコタイプ、サンショウクイタイプの鳥の名前を一つずつさがしてみましよう。

「カッコウ」タイプ

ジュウイチ：ジュウイチ

アオバト：アオーアオー

ホトトギス：ホットトギス

ケリ：ケリッケリッ

マガン：カーハン

ヒヨドリ：ヒーヨ

「ウミネコ」タイプ

コマドリ（ヒンカラカラという囀りが馬のいななきに似ている）

「サンショウクイ」タイプ

ツツドリ（ポツポツポツ……という音が筒をたたく音に似ている）

《参考文献》

国末俊英 1995 名前といわれ日本の野鳥図鑑1・2 偕成社

【今回58号の問題】

今回は、鳥・トリなんでも雑学クイズです。

1. 鶺鴒いで有名なアユを採る鳥はなんでしょう？
①カワウ ②ウミウ ③ヒメウ
2. 日本サッカー協会のマスコットに使われている鳥は何でしょう？
①カラス ②ツバメ ③ハト
3. 1万円札に使われている鳥は何でしょう？
①コウノトリ ②トキ ③タンチョウ
4. あの虎退治の加藤清正が朝鮮から持ってきた鳥は何でしょう？
①カササギ ②キタタキ ③コウライウグイス
5. アヒルはあるカモを改良して家禽にしたものです。原種のカモの種類は何でしょう？
①カルガモ ②マガモ ③オシドリ

